

新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) は発生後 2 年以上経ってもまだ収束の目途が立っていませんが、ワクチンの普及などにより重症者数や死亡者数は減少しています。今回、産婦人科医の視点から現在話題のコロナワクチン・HPV ワクチン (子宮頸がんワクチン) などの新着情報をお届けします。

① 新型コロナワクチン

世界中に蔓延した COVID-19 は多くの人命を奪い、人々の暮らしを一変させました。その中であって、今回新たに登場した mRNA ワクチンを含む複数のコロナワクチンは接種後の感染率の低下と重症例・死亡例の減少が証明されており、国内外で広く接種が進められています。コロナウイルスのバリエーション (変異株) に対する有効性の低下や、接種後数ヶ月以降の効果減衰といった問題もありますが、それも追加接種によってある程度克服されています。大規模で迅速な予防接種推進にご尽力いただいた関係各位には心より敬意を表します。

COVID-19 発症者の中で重症化しやすいのは、高齢者と基礎疾患のある方に加えて、妊娠後期の女性も含まれます。妊娠後期の女性は重症化だけでなく早産のリスクも高くなります。妊娠中のコロナワクチン接種によって流産・早産や児の先天異常は増加しないことが確認されており、また胎盤を通して胎児に移行した抗体が乳児期の感染リスクを下げる可能性も報告されています [1]。したがって妊娠中のどの時期であってもワクチン接種が推奨されています。

② HPV ワクチン (子宮頸がんワクチン)

子宮頸がんの 95% 以上はヒトパピローマウイ

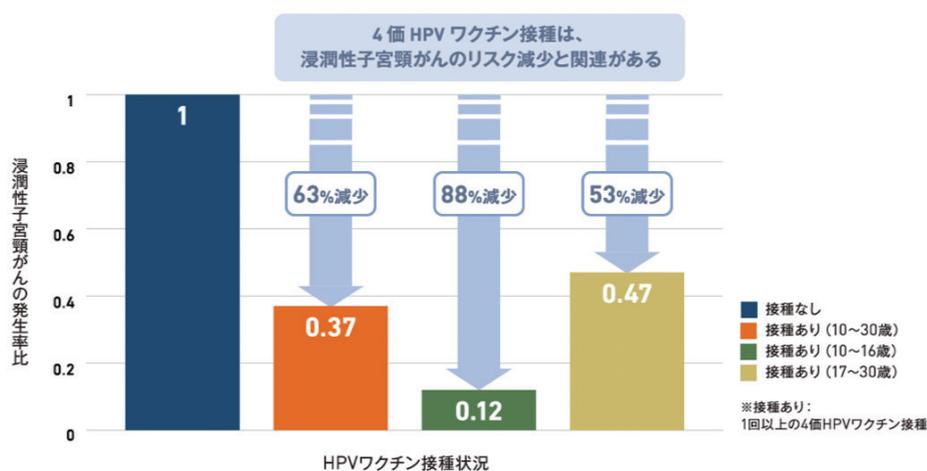
ルス (HPV) の持続感染に起因しており、HPV ワクチンによってそのリスクを大幅に減らすことができます。現在定期接種となっている 2 価・4 価ワクチンでは 50 ~ 70%、任意 (自費) 接種となりますが 9 価ワクチンでは 90% の子宮頸がんが予防できると見込まれています。実際に、北欧や英国からは HPV ワクチン接種開始後に若年女性の子宮頸がんが大幅に減少していることが報告されています [2] (図 1)。

日本では 2013 年に上記ワクチンが定期接種となりましたが、接種後に多発性疼痛・運動障害・記憶障害など多様な症状が起きたことが副反応疑いとして報告されて社会問題となったため、その後 8 年間にわたって積極的な接種勧奨が中断されていました。しかしそれらの症状とワクチン接種との因果関係は証明されず、同ワクチンの有効性と安全性に関する知見が蓄積されてきたことから、今年 4 月より積極的接種勧奨が再開されました。それによって対象年齢の女性の家庭に接種の通知が届くようになったとともに、接種の通知が届かなかった世代 (今年度で 17 ~ 25 歳となる女性) への無料追加接種が決まりました。

現在国内では HPV ワクチンは 3 回接種が基本となっていますが、海外では 15 歳未満なら 2 回接種で十分とされており、今年 4 月には WHO から 1 回接種でも有効とする声明が出ています [3]。子宮頸がんは低~中所得国での罹患率・死亡率が高いことから、高額で供給に限りがある同ワクチンの有効活用が求められており、国内でも接種回数の見直しが必要かもしれません。

日本では毎年 1 万人以上の女性が子宮頸がんにかかり、3 千人近くが死亡しています。ワクチン接種とがん検診の普及によって子宮頸がんを制圧することは私たち産婦人科医の悲願です。現在、

4価HPVワクチン接種と浸潤性子宮頸がん発生の関係



17歳になる前に接種した場合、浸潤性子宮頸がんになるリスクが**88%低下**

➔ **若年での接種の方がより効果的である**

図1 HPV ワクチン接種と浸潤性子宮頸がんのリスク低下: スウェーデンからの報告

原典: Lei J, et al. N Engl J Med. 2020;383(14):1340-1348.

YOKOHAMA HPV PROJECT ウェブサイトより引用 <https://kanagawacc.jp/vaccine-wr/338/>

明和病院では4価と9価の2種類のHPVワクチンを接種しています。

③妊娠中のワクチン接種について

インフルエンザ、B型肝炎、百日咳・ジフテリア・破傷風(Tdap)などの不活化ワクチンは妊娠中であっても必要に応じて安全に接種できます。小児期に風疹の予防接種を受けていなかった女性は先天性風疹症候群発症予防のためにできれば妊娠前に風疹ワクチンを接種しておくことをお勧めしています。風疹ワクチンには弱毒化された生ウイルスが含まれているので妊娠中は接種できません。したがって妊娠中は家族の方に接種していただいて自身も感染予防に努めた上で、産後早い時期に予防接種を受けるとよいでしょう。もしも妊娠に気づかず接種した場合でも、ワクチンに含まれる弱毒化ウイルスによって胎児に障害が起こったという報告はありませんので、あまり心配せずに妊娠を継続するようお話しています。

ことワクチンに関してはメディアでもネット上でも様々な情報が氾濫していますが、それらは玉石混交であり、エビデンスが乏しく偏った内容の発言もしばしば見受けられます。私たちは忙しい日

常診療の合間にも国内外の医学雑誌、医学会や公的保健機関、感染症の専門家などから正しい情報を入手して、知識を日々アップデートしていく必要があります。

文献:

- [1] CDC. COVID-19 vaccines while pregnant or breastfeeding. updated Mar. 3, 2022. <https://www.cdc.gov/coronavirus/2019-ncov/vaccines/recommendations/pregnancy.html>
- [2] Lei J et al. HPV vaccination and the risk of invasive cervical cancer. N Engl J Med 2020;383(14):1340-1348.
- [3] WHO. One-dose human papillomavirus (HPV) vaccine offers solid protection against cervical cancer. 11 April 2022 News release. [https://www.who.int/news/item/11-04-2022-one-dose-human-papillomavirus-\(hpv\)-vaccine-offers-solid-protection-against-cervical-cancer](https://www.who.int/news/item/11-04-2022-one-dose-human-papillomavirus-(hpv)-vaccine-offers-solid-protection-against-cervical-cancer)